

味噌汁対話

応答ではない　しかし

どこからか立ちのぼってくる

〈こたえ〉がある

けはいのように　かすかな

けれど　たしかな

たとえば

味噌汁の湯気のようなものだ

母の味も　炊き出しの有難味も

涙の塩味とないまぜに啜った記憶も

同時に匂い立ってくる

あの日も生きていたし

きょうも生きていることに

答えはない

応えてくれるひともない

火を止め　そうつと味噌を溶く